

石巻かほく
2017年(平成29年)10月31日(火曜日)

(3・11の逆)に「雨ニモマケズ」を書きました。東北人に共通する魂のすじめがあります。

2011年7月に阿部捷一元船越小校長に案内されて宮城学院女子大の新免責教授、佐藤金一郎さんと牡鹿半島の名振、船越、谷川などの学校跡を訪れました。過疎、高齢化、少子化になっている村に大地震と津波が襲いました。名振で「持論ですが教育が進めば進むほど過疎が進む」と放った満照寺の畠山貫梁住職の言葉は重みがありました。若者たちが郷里を捨てて大都会に住みついてしまふからです。

賢治は花巻の人々にベートーベンの「田園」を聞かせました。「都會にわざわざ行かなくてもいいよ、ここがいいんだよ」と聞いたかったのです。神戸国際支縁機構は「田・山・湾の復活」を旗印にしました。ふるさとを見直す小さな手伝いが始まりました。

北上川の上流に古代米の第一人者佐藤正弘さんがおられます。12年に石巻の「田んぼアート」コウ

つつじ野 田・山・湾の復活

ノトリの計画に協力してくださった。兵庫県・宮城県の農学校の生徒、阿部勝さんのが家族が応援してくださり沢田で田んぼアートが完成しました。神戸の若者たちはそれまで稻の束もかついたことがありませんでした。

釜谷に大川小学校があります。森林組合の依頼で学校の裏のバツトの森で間伐・間引き・枝打ちやまき作り、炭焼きをし顔も真っ黒です。誰にも褒められませんでした。

県漁協（丹野一雄組合長）の紹介で石巻市渡波の漁師本田巧さんの船に乗り、ノリの収穫や同市渡波の漁業者である丹野靖誠さんのカキの採苗器を海面からつるす作業もおろおろでした。

ボランティアは「でぐのぼう」にすぎません。しかし被災地に行つて「被災者が日本本から忘れられないことを証明すること」でした。「素人に何ができるべ」と冷ややかな農民や漁師ともいつしか「雨風に負けない」静かな笑いが復活していました。

（岩村義雄 神戸国際支縁機構会長 神戸市垂水区）

宮沢賢治は苦しむ人々に「一人づつぶつつかって 火のついたやうにはげまして行け」と記しました。2014年2月、第36次東北ボランティアに京都大、神戸大、関西学院大などの学生も参加していました。日本の将来を支える性あふれる若者はある体験をしました。活動中は「田・山・濱の復活」や傾聴ボランティア、雪がきに汗を流しました。

一方で、被災者の家族の分裂、離婚、孤立死の問題など「できない限界」があることに気付かされました。私たちは「無力」さを味わいます。

雪が積もった朝、石巻市渡波で「路上で生活をしている人」田口政夫さん(75歳)が立ちすくんでいました。誰彼となく、持てる全てのカイロを取り出しました。「井感」する全てが研ぎ澄まされた瞬間です。田口さんに「一人づつ怖そうに近づきました。一方で田口さんはほほ笑みで受け取られました。ボランティアの参加者約30名はあまりの氣高い人柄に打ちのめされました。

共苦

に溺れてやうやく死ぬとの向ふ側まで一緒に歩いて行ってやらうの言葉が若者に着火しました。参加者から「神戸にもホームレスはおられるの」焼き出しをさせていただこう」と声が上りました。ボランティアから神戸に戻り一週間が経過した時、学生たちは再び集まりました。阪神・淡路大震災以降に住み始めた東遊園地(神戸市役所隣)の野宿者に焼き出しが始まりました。神戸国際支縁機構のメンバーである楠元留美子さんが班長となり路上生活者と一緒に「共食」し家族となり、今も続いている。火のついたやうにはげまして行け」と賢治が言った「励ま」すの漢字は「力」が含まれます。共感、共苦、共食に積極的に行動する源流になりました。

ところが、独居、孤立死に直面する被災者からむしろ逆に「力をいただけるとは誰も想像していませんでした。団体ではなく「一人ずつ」地の果てまでに寝袋をもつて「行く」ように変えられたからです。

石巻やほく

2017年(平成29年)11月14日(火曜日)

ボランティアは無縁社会からの
よすがを追い求めます。

2011年11月5日、石巻市門脇町にある西光寺(樋口隆信住職)に立ち寄ったダライ・ラマ14世は著書で「同じ人間として痛みを分かちたい」と語り「共苦(二ンジエ)」の思想を説きます。

つまり「慈悲」だけではなく他の苦の活動をきっかけに自然災害で悲惨な思いをしている所へ機構に向かうようになりました。バヌアツやネパール、ペトナムなど、宗教が有る無しにかかわらず日本の若者が「縁の下の力持ち」として報道で取り上げられない所へも「出掛ける」ようになりました。

行く先々で物資などの提供をすることが中心ではありません。被災者の「縁」「寄す処」つまり心のよひどころ、頼りとするところや心の支えとして「共生」「共苦」

します。

やがて日本からの名もない多くの方々の寄付が集まり孤児の家ができるようになりました。そこで共同生활する孤児たちの教育費「カヨ子基金」も里親の皆さんから届けられています。孤児たちが「大人になりたい」という最大の願いが実現に至るとしています。

明るい表情になった孤児、夫を亡くした独身女性、高齢の独居者との縁こそがいかなる政策、市場経済の変化、革命よりも優先すべきことではないでしょうか。もちろん海外ボランティアに行きたくてもいけない苦しみを「共苦」するのも「苦縁」です。

「苦縁」なる「よすが」は「時間」「金銭」「仕事」の「ゆとり」とも無縁です。災害が多くなつてゐる今、地縁や血縁、同じ学びや卒業生だけでは救済できない貧困への責任が求められています。

(岩村義雄 神戸国際支縁機構会長 神戸市垂水区)

苦縁



ボランティアは「運動」ではなく「無償」「自主」「対話」の活動です。

活動は「無償」で行います。参加

者は交通費、食費、宿泊費などを自ら支払って現地へ向かいます。経済という物差しからは「ただ働き」で損になります。日本には、互酬という習慣がありました。田植えを手伝つてもらうと稻刈りでお返しをします。共同体をつなぎ合わ

せる接着剤になつてきました。

しかし、ボランティア道は恩をやり活動を続けます。ボランティアの語源となつた聖書の「V.O.I.（ヴォロ）」（自ら進んで）に由来しています。

「V.O.I.」は「自主」性です。「奉仕」と区別されます。「奉仕」は「仕え奉らん」が語源です。辞典によると、「奉仕」は「國家・社会・上位の者などに利害を考えずにつくす」と定義します。

「奉仕する者」と「受けれる者」との上下関係が含まれます。「奉」に「イ（にんべん）」がつき俸給

2017年(平成29年)11月21日(火曜日)

などが与えられて当然という発想が生じます。明治維新から「官」主導でいつしか「有償」が当たり前になつてしましました。交通費などがあてがわれます。阪神・淡路大震災以降、全国に雨後の竹の子のようにNPOが誕生しました。いつのまにか有償ボランティアが増えました。「官」の下部組織になって助成がないと活動が息切れします。

三つ目に「対話」性が生命線です。「うめき声」があれば現場に急行します。被災者に寄り添うのは机の上ではできません。現場主義です。寄り添うとは徹底的に相手側の状況や都合に合わせます。ボランティアはしたいが、今は楽しいことをしたいという立ち位置に揺れ動くゆとりがありません。条件、資格、経験を問いません。ほほえみ、声の色、発する「気」などの身ぶりを通じて生きざまを示します。運動ではなく、個々の活動に基づきます。生きざまですから誰でもができるのがボランティア道です。

ボランティア道



(岩村義雄 神戸国際支縁機構会長 神戸市垂水区)

2017年(平成29年)11月28日(火曜日)

やませは「餓死風」といわれた
りしました。筆者は東北が世界に
誇る3人を連想します。八戸の医
師であった安藤昌益(1703-
1762年)は東風による餓死を
憂いました。2人目は「生きべく
んば民衆とともに、死すべくんば
民衆のために」と唱えた石巻出身
の弁護士の布施辰治(1880-
1953年)です。3人目は前回
取り上げた宮沢賢治です。

3人に共通するのは「人権」へ
の深い「共感」です。
経済大国である日本で餓死が出
るのは、やませが原因の一つと言
えます。1883(天保4)年、
東北地方は大洪水と冷害に見舞わ
れました。凶作により東北だけで
も餓死者は10万人に及びました。
現在の日本は、1981~94年の
餓死者が年平均17・6人もいま
す。1995年以降に増えました。
厚生労働省によると2011
年に日本では餓死2053人。97
年から11年までに餓死した総数は
2万5525人。年平均1053
人となり、1泊当たりでは5・6
人。一方で政府広報によれば、日

本では年間1900万トンの食品が
賞味期限切れなどで廃棄されてい
ます。

富める人ばかりが潤つていま
す。学生はバイトをかけもちして
もパソコン1台も買うゆとりがあ
りません。ニートやひきこもりも
珍しくなくなりつつあります。主
婦も1ヶ月1万円の食費でやりく
りしている事例もあります。主
肩を寄せ合って生きてきました。

しかし現在、コミュニケーション
能力がなくなりお互いに干渉も
せず心が貧しく細っています。

布施辰治なら生活保護などの救
済手段をもつと活用するように仕
組みを変えたことでしょう。しか
し現在、日本列島を覆っている風
や空氣、考えに「受縁力」はあり
ません。

今、里山、里海、田園を回復し
なければ、やませで餓死者だらけ
になります。ムラ社会で自分の
食べ物は手づから育てる「耕支縁」
の風が東北から起ることを期待
しています。

**長 岩村義雄 神戸国際支縁機構会
神戸市垂水区**

つつじ野 やませが吹き荒れる前に